黄昏時人生相談

夏山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黄昏時人生相談

【Ｎコード】
Ｎ２９６９Ｔ

【作者名】
夏山

【あらすじ】
人気の無い夕方の路面電車。私は見ず知らずの少年から突然ちょっとした身の上話をされる。おかげで居眠りしそこねた……という話。

「おれ、ひとを殺しました」
少年は確かにそう言った。
肩が触れそうな至近距離で隣に座る、見ず知らずの少年からの告白としては重すぎた。知らない子供相手に、私は否定も肯定も出来やしない。
「驚かないんですか」
「嘘なの？」
「本当です」
「じゃあ自首したほうがいいと思うよ」
人気のない夕暮れの電車はゴトゴトと規則的な音を立てながらトンネルを抜け、家々の間を走っている。席は十分に空いているというのに――私たちの他には、優先席に座っているおばあちゃん一人しかいない――わざわざ、私の隣に座ってきた少年。恐らく中学生くらいだろう。紺色のブレザーを着て、鞄を持っている。履いているスニーカーは泥で汚れている。運動部だろうか。そういえば、昨夜は大雨だったらしい。
「お姉さん、そんな当たり前のことを言われても面白くないんだけど。せっかく、勇気を出して話したのに」
「そんなこと言われてもねえ。今の話が冗談でなきゃ、自首しろとしか普通言えないでしょ。他に思いつかないよ。一般人の発想しかできなくてすいませんね」
現実感に乏しい会話だった。
普通の子供に見える。髪は黒いし、制服も着崩れてないし、喋る言葉も、内容がおかしいだけで、口調はしっかりしているし。
「別に信じてくれなくたっていいんだけど。もちろん、これから自首するつもりですよ。だけど捕まったらしばらく電車に乗れなくなるし、戻ってきても、この街には住みづらくなるだろうし。ここか

ら見える夕日も見納めになるんじゃないかと思ったんだ。だから安心してよ。あと二駅過ぎたら、降りて近くの交番に行くつもりだからさ」
「……だから、悪いんだけど、そんなこと、私に話されても困るんだけど」
少年が笑った。
「やっぱりあなた面白いなあ。おれが誰を殺したとか、興味ないの。もしかしたら明日の話題を先取りできるかもしれないのにさ」
「私にきいてほしいの？　でもあなたあと二駅で降りるんでしょう。もう時間ないよ。ほら、……あと一駅だし」
アナウンスが流れて、がたがたと電車が停止した。優先席に座っていたおばあちゃんが電車を降り、ついにこの車両には私と少年だけになってしまった。……なんて状況だ。
夕焼けが向いの窓から差し込んできて、とても眩しい。鮮やかな蛍光オレンジの光が、今の私にはきつすぎた。だから向こう側のブラインドを降ろしたくなったのだが、夕陽を見たいと言った少年が、窓の向こうを見つめている。私はただ目を細めるだけにしておいた。
「そう。きいてほしいんだと思う。ほんとは親とか友達のほうが、事情も知ってるとことかあるし、よかったのかもしれないけど――どうしていいかわかんないじゃん。今日の朝まで普通の子供だったり友達だったりした奴が、突然自分達の知り合いを殺して、それなのに案外普通の顔して『理由を話したいんだ』とか、そんなの気持ち悪くねえ？　おれはやだよ。そんなの。どうしていいかわかんなくなるじゃん。
だから、あなたに話したいんだ。知らない人殺しの話に同情とか、しないだろ？
あと一駅分だけつきあってくれてもいいじゃんか。きっと話のネタになるよ」
一息にそこまで喋った少年は、眉間をぎゅうとしかめて、窓から見える駅のホームを睨みつけた。

「あと一駅なんだ」
「きくだけでいいなら、きくけど。っていうか、それだけしかできないけど」
「それでいいよ。ありがとう」
私の顔を見て、少年はちょっとだけ微笑んだ。やはり、どこにでもいそうな普通の子供にしか見えなかった。
電車が動き出す。
「おれ、さっき教室で担任を殴って、突き飛ばしたら、どっかに頭ぶつけたみたいで、それっきり動かなくなっちゃったんだ。で、五分くらい見てたんだけど、動かないままだったから、教室を出て、今この電車に乗ってる。……まあ、それだけなんだけど」
「え、それだけ？」
「それだけ」
普通、話としてはそこに至るまでのごたごたがあるんじゃないだろうか。だけどそのあたりの事情は話したくないのかもしれない。
「死んでるのか確かめたの？」
「触りたくなかったから、確かめてない」
「じゃあ、ほんとに殺しちゃったかどうかわかんないじゃない」
「うん。でも、おれはやっちゃったと思ったんだ」
少年は言葉を切り、好きだと言った夕陽から目をそらして、膝の上にある鞄へ視線を落とした。
「もしもあいつが死んでなくて、たんこぶだけですんでたとしても、おんなじだよ」
見てわかるほどの力を込めて、少年は自分の拳を握りしめた。
「おれは死ねって思ったんだからさ」
「思うのと、実際やるのとは、違うんじゃないかなあ。赤の他人のお姉さんとしては、自首する前に、教室に戻ったほうがいいような気がしてきたよ」
「万が一生きてたら、また死ねって思うかもしれないし。……一日に二度も殺すなんてやだよ」

「じゃあ、一日頭冷やして、明日登校してから考えなよ」
電車の速度が緩まってきた。そろそろ駅が近いのだ。
目の前に穏やかな海が広がって、真っ赤な夕陽と、窓一面の空が現れる。
私には、眩しいばかりの光だった。
唯一見られる太陽の光に贅沢だと思いこそすれ、文句なんて言うつもりはないけれど。
「夕陽が好きなら、朝日も好きになったほうがいいと思うよ。夕陽は死んでも見られるけど、朝日は見られなくなっちゃうし」
「マジで？　そういう仕組みなの」
「なんでか知らないけど、そうみたいよ。他のひとはしらないけど、私の場合は黄昏時じゃないと動けないんだよね。なんでも実際体験してみないとわかんないもんよ」
へえ、そういうものなの。知らなかった、と間抜けなことを少年はつぶやいた。そりゃ知らないでしょうよ。生きてんだから。
「……ほんとは、おれ、お姉さんに喋ったら怒られるかと思ったんだ。ひとを殺したとか言ったら、ヤバいんじゃないかなって」
「なんで、そう思ったの。ちょっと待って。まさか、今までの話嘘だったの？　もしや度胸試しとか学校で流行ってんの？　そういえば、この間も私、あんたぐらいの年の子供に恋愛相談されたけどまさか」
「いや、おれのは嘘じゃないけどさ。だって、お姉さん、殺されたって話だったし、やっぱ、殺された側としては、思うところがあるんじゃないかと」
「え」
「……え、あんた、三十年前の猟奇殺人で殺されたんじゃねえの？」
目を丸くした私を見、少年も多分同じくらい目を大きく見開いたあと、全く不審そうな顔になり、首を傾げた。
「……違うのかよ」
「違うよ。猟奇殺人じゃなかったよ。その話誰からきいたの」

「誰って……いわゆる都市伝説？」
がたがたと、電車が止まった。
「ほら、駅着いたよ。降りるんじゃないの」
「……降りるけど……ああ、なんか、いろいろ、拍子抜けした」
ぐったりした様子の少年が立ち上がる。
「疲れたのは私も同じなんですけど。貴重な癒しの時間を邪魔すんなよってかんじなんですけど」
勝手に隣に座って、勝手に自分のことばかり喋って、勝手に私に何かを期待していた子供は、もう私の言葉なんてきいていらっしゃらないらしい。
どこかの中学生男子は、私にはもう降りられないホームへと、境界を跨ぐ足を止めた。車内を振り返らないまま。
「やっぱり、あいつ、死んでないといいなあ」
「祈っといてあげるよ」
それだけしかできないけど。
出発のベルが鳴る。
「……もし、今日の話がなんてことなく終わったら、結果、報告しに来てもいい？」
「結構です。きいておいて何だけど興味ない。その代わり、変な噂はやめるように友達に言って頂けると嬉しいんですけど」
「了解。……ありがとう、おねーさん」
笑って、子供は境界を跨いでしまった。電車が再び走り出す。
終点まで行けば、今日の時間はおしまいなのだ。ああ、もうあと四駅しかないではないか。人気の無い電車でうとうとする幸福に勝るものはないと思っているのに。
「……あの、すいません。失礼ですけど、無料の悩み相談をしてくれるという噂の」
「ごめんなさい人違いです」
だから、クーラーが効いているとはいえ、席が空きまくっている車内で、密着して隣に座らないでもらえますか。

「それ以上近づいたら、痴漢って叫びますよ」
「えっ、あっ、すみません。そういうつもりは少しもないです。というか、あなたに痴漢しようとしても、触れないのでは」
しまった。このサラリーマン、非常識だが冷静らしい。私は思わず開けてしまった瞼に後悔した。
終点まで、あと四駅しかない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2969t/

黄昏時人生相談

2011年5月15日18時10分発行